

田辺元における死者と生者の実存協同について

浅見 洋

一 死の哲学の概要―死復活と実存協同―

田辺元の後半生の哲学は六〇歳代の〈懺悔道の哲学〉と七〇歳代の〈死の哲学〉に大別され、両者を貫くキーワードは死復活、実存協同である。『懺悔道としての哲学』（一九四六）における死復活は〈挫折による古き自己の死〉という比喩的な死からの復活である。また、実存協同は自己の死を自覚した生者たちの協同である。比して、死の哲学の代表作「生の存在学か死の弁証法か」（一九六二）では、死復活は〈死者の復活〉を媒介として生者において生起するとされ、実存協同は〈死者と生者の実在協同〉として記されている。二一世紀に入ってそうした他者としての死者が登場する田辺の死の哲学を、《革命的な発想》⁽¹⁾、《画期的な意義》⁽²⁾ という賛辞と共に、再評価する論考が散見される。

死の哲学のダイジェスト版である「メモメント・モリ」（一九五八）には《死の時代は当然に「死の哲学」を要求する》⁽⁴⁾（151）*とある。死の哲学の提唱は現代を死の時代と解する歴史認識に基づき、哲学史の運命としてテーマ化している。生の哲学は西洋近代哲学の主潮流であって、その申し子である科学技術の発達を媒介とし、生の解放と充実を目指して展開してきた。その結果、生そのものが見失われ、ニヒリズムが浸透し、自己破綻に達した。破綻の原因は《生の直接的なる享受を無反省に追及し、その結果、生は常に死に裏付けられ、何時その表裏が顛倒して、死が表に現れ生が裏に追いやられるか解らない》⁽⁴⁾（10）という認識を失ったからである。それ故、田辺は中世の *memento mori*（死を忘れるな）という格言を想起させることによって、死を介して生を見る弁証法的視点を徹底しようとした。

「生の存在学か死の弁証法か」の一部は『Todestadietrik』と独訳されて『ハイデッガー七〇歳記念論文集³』に寄稿されたものであり、その主題はハイデッガーの生の存在学を批判しつつ、死の弁証法を構築することにあつた。その書の冒頭で田辺は《死の自覚がその中心的根本支柱となつて居る》(④ 222)と賛辞を呈しつつも、ハイデッガーの死は〈観念的指標〉にすぎず、生の外側に止まる死であつて、弁証法的に捉えられていないと批判した。

実存協同は生者と死者が交流する〈生死交徹的自他相入の交互態〉として、カトリックの〈聖徒の交わり (communio sanctorum)〉を非神話化したものとして表象されているが、より《一層具体的には大乘仏教の菩薩道の立場⁴》であるとして碧巖集第五五則の公案「道吾漸源一家甲慰⁵」を例に説明されている。田辺の独自の公案解釈では、生死が〈表裏相即不可分離の關係〉にあるという漸源の自覚のうちに、復活した死者道吾の慈悲が働いていると解されている。そのように死の哲学における死復活は単に死者に起こる出来事ではなく、死者と生者間に起こる出来事、死者が生者の内に復活、協同しているという事態を言い表している。その点で、最晩年の田辺の復活理解は R・K・ブルトマンの実存論的な新約聖書解釈と軌を一にしている。

また、死復活は、単に相対者と絶対者との間に瞬間的・微分的に生じる出来事ではなく、相対者と相対者との関係において

も持続的・積分的に成立する出来事である。通常共同体において水平の方向に展開される死復活の即自態は、伝統と言われるものであり、先人たちの遺産を受け取り、それを後進へと受け継ぎ、そのことによって先人が後進のうちに生きるという実存協同に他ならない。

二 〈死の哲学〉構築の背景―死別体験―

末木文美士が《コペルニクスの転回⁶》と記した懺悔道から死の哲学への転換点となつたのは、一九五一年九月の妻ちよとの死別体験である。田辺はちよの三回忌の後、野上弥生子に次のような短歌を付した書簡を送っている。

生き返へれ生き返へれ妻よ生き返へれ

汝れなくて我がで生きられん

汝れとともに我も死にたり今もなほ

日毎に死にてよみがへり生く

汝れもわが心によみがへり共に生く

二人の命なほも続くか

わがために命ささげて死に生ける

妻は蘇へりわが内に生く

クリストに倣ひて死にしわが妻は

福音を証す復活の光

これらの短歌には死の哲学へと成熟していく田辺の霊的経験が詠われている。また、そこには死の哲学の鍵概念である死復

れていった。

三 〈実存協同〉から開かれる新局面

1 〈死の時代〉における思想的意義

〈今日は「死の時代」である〉という田辺の切迫した時代認識は、広島への原爆投下など、抑止できなくなりつつあった科学技術への危機感に根ざっていた。そして、東日本大震災での原発事故、深刻化する環境破壊、多死社会の到来等々、我々には終末を告げる鐘の音はさらに高く、不気味に響いているのではないか。それを預言者の言葉として聞か、耳をふさいで生の哲学にのみ拘泥し続けるか、我々の思索と実践は大きな岐路に立たされている。

上田閑照が《汝の死の事実によってリアルになった「私と汝」を、絶対に距てられていると同時に生死を超えた実存協同として初めて真に経験し思惟するに至った田辺の考え》と記したように、死の哲学は妻との死別体験を契機として構築されたが故に、愛を絆とする二人称の関係の色合いが濃い。ただし、死の哲学の諸論文では「道吾漸源一家弔慰」における師弟関係、ないしは肉親関係を越えた〈モナドロジー的に形づくられた実存協同〉としても記されている。

末木が《宗教Ⅱ哲学の営みは、歴史の中の死者たちの声を聞くことにはじまり、それ自体歴史的な作業である》と書いたように、人文学が遺された文献や文化を通して死者と対話し、そ

活と実存協同の発想が歴史認識と哲学的思索だけでなく、二人称の死の体験とその後の死者との関係の再構築に裏打ちされていたという消息が確認できる。ただし、田辺の二人称の死の体験が死の哲学として文章化され始めるためには、尚四年半の歳月を要した。一九五六年二月二日付の野上宛書簡には《死の哲学》はたとい遺稿になっても、書上げなければ死ねないつもりで居りますから、思い残す所がないまで徹底的に煉るつもりで居ります。「死の哲学」は小生一人の哲学ではなく、「死の世紀」たる現代の哲学として万人の哲学でなければならぬ筈です。……科学を尊重致す小生が、復活の如き神話的伝説を信ずるなどとは、言語道断とも申せましよう。……しかし、妻の死は之を可能にしました。もはや復活は、客観的自然現象としてでなく、愛に依って結ばれた人格の主体性に於て現れる霊的体験すなわち実存的内容として証されます。……死せる妻は復活して常に小生の内に生きて居ります》と記されている。

この書簡から、死の哲学の執筆に着手するために乗り越えねばならなかった課題が那辺にあったかが推察できる。一つは死者の復活に付き纏う神話的説明の突破であり、今一つは死の哲学を歴史的必然性と哲学史的妥当性を持った万人の哲学に練り上げることであった。前者の突破は妻の死復活という霊的体験を通して可能になった。後者は《現今の原爆水爆は正に、今日を「死の世紀」たらしめて居ます》⁷⁾という時代認識に深まり、ハイデッガーの生の存在学を批判することによって練り上げら

れを回施しようとする営みだとすれば、人文学は死の哲学の構造に類比的である。とすれば、現今の大学に跋扈する〈文系不要論〉は時代錯誤であり、自我を直接的に肯定する生の哲学やその嫡子である科学技術や経済施策が軋む音ではないのか。

現代は生の空間的拡張であるグローバル化の中でローカルな伝統文化や儀礼が失われ、死者との対話が消えていく時代である。文化や儀礼の継承と変容は過去存在との協同行為であり、かつ未来の生者に回施しようとする行為である。それ故、実存協同は非連続の連続として、生命の連鎖を受け渡していく歴史的営みでもあり、死が運命付けられている生者と未だ生存せぬ者との協同へと拡張可能な思想である。パイオエシックスが〈生存の科学〉として世代間倫理であろうとするならば、死の哲学は極めて現代的で、有効な思想基盤を提供するように思われる。

2 宗教思想が立ち現れる可能性

カラバッジョの絵画「執筆する聖ヒエロニムス」はメモント・モリの象徴である骸骨を机の上に置いて、ウルガタ聖書を翻訳する聖ヒエロニムスを描いている。無教会主義者・藤井武は妻の遺骨を書斎の机の上に置き、この世にありながら来世について書き、そこにあるかのように生きた¹¹⁾。

また、現代日本の宗教哲学者には田辺と同じように〈二人称の死〉の体験から立ち上がった思想が多々見られる。『存在と時間』の死が〈観念的指標〉にとどまったのはそれが経験不可

能な自己の死＝一人称の死だったからである。比して、西田幾多郎の〈わが子の死〉であれ、上原専祿の〈妻の死〉であれ、それらが哲学や宗教学の動機たり得たのは深い悲哀を伴う〈二人称の死〉の経験だったからである¹²⁾。

死が哲学や宗教の問題になってくる所以は、死が単なる生物学的個体の死ではなく、人間の死、つまり人と人との関わりにおける出来事だからである。通常生者間の交わりは、両者のへだたりが解消されたところに起こるが、死者と生者の交わりは分断あるいは不在において成立する。そうした消息を長谷正當は《不在にもかかわらず、むしろ不在の故にこそ真にリアルとなる交わりがある。田辺が実存協同において捉えているのはそのような交わりである。不在の上に成立する交わりは満たされることがないので、悲哀を帯びているが、しかし、悲哀において交わりは純化され透明化されてくる。そのような不在の方向に交わりを突き詰めて行く所に、宗教的関係の基礎となる「信」といわれる有りようがある¹³⁾。他者は死することによって生者との交わりを断つのではない。愛する者にとって死者は消失してしまふのではない。死者は生者に顕現し、復活する。他者の不在や断絶を介して開かれてくる他者との関わりを西田は逆対応と呼ぶが、そうした逆対応の関係＝宗教関係が〈死の哲学〉の実存協同にも見出される

3 ターミナルケアの新展開への寄与

古来より人類は生の永続を願い、医学はそのニーズを適え

るべく死と戦い続けてきた。そうした医科学の戦果の一つは生物学的生命の延長である。だが、延命治療の生の尊厳さに対する両義性が明らかになるにつれ、終末期医療はケアからケアへと立ち位置を変えた。その位置転換によって死の不可避性を見据えて誕生した医療がホスピスケアである。S・ソルダースによる現代ホスピスの内実は包括的な緩和ケアの実践であり、死にゆく過程における全人的な苦痛の緩和、QOLの保持を目的とする医療である。

死にゆく者、遺される者にとって最も大きな悲しみは永久に忘れ去られ、関係が断絶することである。対して、死の哲学は断絶した死者との関係の再構築を語る哲学である。そこでの死復活は直線の時間において生起する出来事ではない。死者が追憶においてのみではなく、実存協同として関係性が再構築されるということである。そのため、死にゆく者には生者の内的世界に蘇り得る、遺された者には愛する者と協同し得るという希望を与える可能性がある。S・フロイトに代表される臨床心理学の喪の仕事 (grief work) では、死者との情緒的関係 (attachment) を断ち切り、新しい関係 (new relationship) を構築することが強調されてきた。しかし、死の哲学からは、悲嘆の中にありながら、関係を失うことのない、新たな喪の仕事が立ち上がる可能性があると思われる。

現代の死別研究者には、新しい回復モデルとして、喪失対象との絆を断ち切るのではなく、対象を自分の内的世界の適切な

場所に再配置し、絆を死別前とは異なる形で保ち続けることが重要であると主張する者が少なくない⁽¹⁶⁾。例えば、《関係が終わるものであり、遺された人は愛する故人を自分の人生クラブのメンバーからはずさなければならぬという考えは間違いである。……生物学的に死を迎えた後にも、愛する人が心の中に存在し続けることくらい、少し考えれば分かりそうなものである。私たちは引き続き、彼らのことがこだまするのを聞き、彼らのストーリーを語り、彼らの与えてくれた影響を思い出す⁽¹⁷⁾》という記述がある。また、現在 Seelsoergerin (魂のケアをなす人) として活動している K・ラマー (Lammer) は《死者から可能な限り完全に引き離すこと (eine möglichst vollständige Ablösung von den Verstorbenen) に目を向けるのではなく、むしろ、意味を伴って死者を再配置 (Neuerortung) することに注意を注ぐべきです⁽¹⁸⁾》と述べている。

そうした喪失された死者のリ・メンバリング (re-membering) や再配置という現代の悲嘆学 (grief studies) や牧会心理学 (Seelsorge) の主張には、田辺の《死の哲学》に棹さすような死と生の理解が垣間見える。

* (④ 15-17) は藤田正勝編『田辺元哲学選IV』一六一―一七頁からの引用を示す。以下同様

(1) 末本文美士『他者／死者／私 哲学と宗教のレッスン』岩波書店、

- 二〇〇七年、六六頁。
- (2) 芝田豊彦「フランクフルトと滝沢における「過去存在」の思想―田辺の「死の哲学」との関連で―」『宗教研究』八二巻一号、二〇〇八年、四七頁。
- (3) Martin Heidegger *zum siebenzigsten Geburtstag*: Festschrift, Verlag Günther Neske Pöfingen, 1959.
- (4) 『田辺元全集第十三巻』筑摩書房、一九六四年、五四四頁。
- (5) 末木前掲書、六三頁。
- (6) 『田辺元・野上弥生子往復書簡(下)』竹田篤司・宇田健編、岩波現代文庫、二〇一二年、一七一―一九頁。
- (7) 田辺元・唐木順三『田辺元・唐木順三往復書簡』筑摩書房、二〇〇四年。
- (8) 上田閑照「死の哲学」と絶対無』『宗教への思索』創文社、一九九七年、一五八頁。
- (9) 末木前掲書、五頁。
- (10) V・R・ポッター『バイオエシックス―生存の科学』今堀和友・小泉仰・斎藤信彦訳、ダイヤモンド社、一九七四年。
- (11) 浅見洋「妻の遺骨と共に―敗北の勝利者・藤井武」『思想のレクイエム 加賀・能登が生んだ哲学者15人の軌跡』春風社、二〇〇六年、二一九―二三八頁参照。
- (12) 浅見洋「二人称の死 西田・大拙・西谷の思想をめぐって」春風社、二〇〇三年参照。
- (13) 上原専祿「死者・生者―日蓮認識への発想と視点―」(上原専祿著作集16巻) 評論社、一九八八年参照。
- (14) 長谷正當「死の哲学と実存協同の思想―田辺晩年の思想―」『京都哲学撰書第3巻 田辺元―懺悔道としての哲学・死の哲学― 解説』燈影舎、二〇〇〇年、四三二頁。
- (15) 同、四三五頁。
- (16) 小高康正「悲哀と物語―喪の仕事における死者との関係―平山正実編著『死別の悲しみに寄り添う』聖学院大学出版会、二〇〇八年、

一一九―二〇五頁参照。参照部分には、現代の心理療法における死別者と死者との関係理解が明解に紹介されている。

- (17) L・ヘツキ、J・ウインスレイド『人生のリ・メンパリング』小森康永・石井千賀子・奥野光訳、金剛出版、二〇〇五年、二二頁。
- (18) Kerstin Lammer, *Trauer verstehen, Formen-Erklärungen, Hilfen*, 2.Auflage, Neukirchener Verlagshaus, 2007, S.47. (ケルステン・ラマー「悲しみに寄り添う」浅見洋・吉田新訳、新教出版社、二〇一三年、六三頁)
- (あさみ・ひろし、宗教哲学・日本哲学、石川県立看護大学教授)